# 集合的記憶と個人的記憶

## ――記憶の共有性と忘却性をめぐって――

亜細亜大学　有末賢

今回の報告では、個人的記憶と集合的記憶と社会的記憶のそれぞれの位相についてこれから考察していきたい。個人的記憶の位相は、心理学では「記憶」と「忘却」、「記憶力」の側面で考察されてきた。また、ライフヒストリーやライフストーリーの領域では、語りと記憶、インタビューという相互作用の影響と記憶の関係についても考察されている。また、マルセル・プルースト『失われた時を求めて』に代表される文学の領域でも個人的記憶について、文学的考察が深められている。しかし、この個人的記憶の領域では、集合的記憶や社会的記憶の問題とは切り離されることが多い。確かに、個人的記憶は曖昧であったり、不確かであったり、「思い込み」の面も多い。正確な歴史的事実、多くの社会的結果を生み出した歴史的資料に基づいた事実とは異なる個人的記憶も多いかもしれない。

しかし、集合的記憶は、個人的記憶が多数集まって構成されるだけではない。デュルケームやアルヴァクスが指摘しているように、社会の象徴や集合的事実が集合的記憶を構成するのであって、個人的記憶のある面は、外在的社会的事実によって、拘束されているのである。例えば、原爆被爆者の記憶は、原水爆禁止運動、反核兵器運動が高まりを見せるビキニ環礁での第五福竜丸被爆の1954 年 3 月までは、ほとんど声を上げる力がなかった。被爆後 10 年の苦しみは個人的記憶としては、最も苦しい時代であったが、集合的記憶、社会的記憶としては敗戦と戦後復興の時代に、記憶されることがなかったのである。

集合的記憶は、個人の記憶だけでは成り立たない。まさに、集合的になって、そして、「社会の記憶」としていわば公認されていかないと、集合的記憶として記されることはない。集合的記憶の条件は、もちろん、時代状況や世代の経験として多くの人々に共有されるという「体験の共有性」であるが、「共有性」の中身は、集合的記憶の経験の仕方によって異なる。

アルヴァックスは、集合的記憶と個人的記憶を対立したものとしてではなく、個人から集団へ、集団からの離脱と個人という一連の連続線上で考察されている。

つまり、戦争の記憶は、個人的記憶の部分を絶えず集合的に再生産されない限り、歴史的時間の流れの中で風化してしまうのである。それは、戦後 70 年であれ、戦後 20 年であれ基本的には一致している。戦後 70 年の今日、原爆や空襲、沖縄戦などを「忘れてはいけない」という声が唱え続けられるとしたら、それは、憲法 9 条を中核とした戦後日本社会の思想の反映であると言える。集合的記憶の共有性がなければ、もともと個人的記憶を表出する術も存在していない。極端な例ではあるが、私は「自死遺族」であるが、このことは、ほとんど「集合的記憶」を共有することがない。したがって、多くの「自死遺族」たちは、沈黙し、「語りにくいこと」を抱えて生きている。まさに、このような例が個人的記憶である。それに比べて、戦争の記憶は、集合的記憶、社会的記憶として存在している。それが、原爆であったり、東京大空襲であったり、特攻隊の記憶であっても、それらは、確かに「一度限り」であるが、戦争と戦死者として、集合的記憶につながっている。それは、太平洋戦争だけではなく、中国大陸や南洋諸島への侵略、ドイツ・ナチスのユダヤ人強制収容所とホロコーストなど多くの社会的記憶につながっているのである。